

天台禪門部について

關 口 慈 光

佛教教判論の最も完備せるものと目されている、かの天台教判は、突如として天台大師に依つて説かれたものではなく、それに先立ついわゆる南三北七等の諸家の努力に對する綿密な「研詳去取」の上に構成されたものであつたように、三種止觀、四種三昧、二十五方便、十乘觀法、百法成乘等と稱せられる實踐部門の大組織も、實は、突如として天台大師に依つて構成されたものではなく、教判論の場合と全く同様に、それに先立つ諸家の禪觀法門に對して緻密な批判と取捨とを試みつつ、それらを綜合して大成され來つたものであらうかと考えられる。

また、天台大師それ自身に於いても、一念三千の觀法は、その最も圓熟せる晩年の思想として、摩訶止觀に至つて初めて説かれたものであることが、既に論ぜられてゐるように、その生涯には思想と教學との上に種々の推移があつたと考えられる。

かゝる點に留意しての、天台大師教學の思想史的研究に於いては、天台禪門部ともよぶべき一部門を、天台止觀部ともよばれるべきものに對して、新らしく設定することが必要であらうかに考えられる。そしてそれは、摩訶止觀の思想教學をその成立展開の經緯に於いて究明せんとするときに、その最も肝要な前提となるものであるばかりではなく、ひろく禪觀思想全般の研究についても、特にそ

の基礎的地位を占めるべきものかと考えられる。

いま、ここに天台禪門部と名づけようとするのは、天台大師の撰述である次第禪門十卷を中心に、禪門要略、禪門口訣、禪門章等、禪門の二字若しくは、禪の一字を書名のうちに用いている撰述、及び書名はそうでないとしても、その内容が思想的にこれらと特に類通している一連の書物群である。そしてそれを摩訶止觀十卷を中心として、止觀大意、止觀輔行傳弘決等の摩訶止觀注疏群を含む天台止觀部とよばれるべきものに相對せしめようとするのである。

天台の法門は教理部門と實踐部門、即ちいわゆる教觀二門に分けられ、二門の關係が兩輪兩翼にたとえられて、その雙美であることを特にその特色とするとされて來てゐるが、しかもその中、觀門については、いわゆる三種止觀がその大綱であるといわれている。

天台の教學は教判論がその樞要をなすと信ぜられ、且つその教判はいわゆる五時八教であるとされている。然しながら、天台の教學は天台大師自からの撰述に依つてこれを見るべく、その中心がいわゆる天台三大部にあり、教判論は特に法華玄義の五重玄義の第五、教相玄義の段に於いてこれを見るべきであることには、何人の異議をも挾む餘地を存しないであらう。しかも三大部の中には五時八教ということばさえ存在していないことが極めて注意される。そして

天台教判は、この教相玄義に明記しているところに依り、頓、漸、不定の三教相を以てその大綱となすべきであろう。如來一代の化儀をかく分析し研究した結果は、それが直ちに頓、漸、不定の三種止觀法門の組織となつてゐることに於いて、天台教學のいわゆる教觀一致の特色が完うされてゐるのであると考えられる。

即ち法華玄義卷第十に於いて、先ず教相の大綱なりとしてこの三教相を詳説し、次にこれが教觀一致の玄意に基づいて教觀二門に究明され、觀門の立場より見る頓教相とは摩訶止觀十卷に説くところの如く、觀心釋に依る漸教相とは次第禪門十卷に於いてこれを見るべく、不定教の觀心釋は六妙法門一卷に於いて示すところの如し、といつてゐるが、これが即ち天台止觀法門の大綱であるといわれてゐる三種止觀法門に外ならない。これら天台教學の教觀二門の具體的關係の究明は、いまは暫く別箇の問題とするとしても、天台止觀法門の大綱がこのいわゆる三種止觀にありとは、古來かくの如くにいわれて來た通りであつて、いまはこゝに論考の緒をおく。

即ち天台止觀法門の實修の思想的基調は、まさにこの三種止觀に存するとなすべきであらうが、いまは止觀法門成立の思想的見地から、次第禪門と六妙門等とを一括して、天台禪門部と稱し、これを摩訶止觀等の天台止觀部に對せしめようと試みるわけである。

○

天台禪門部という名稱は、いまこゝに初めて用いられるものではない。即ち傳教大師に於いて既にその用例を見出すことができる。その將來目錄及び經藏目錄等に於いてであり、しかも天台大師撰述等の分類に就いてである。將來錄には台越の兩目錄があり、台州錄は天台山に在つて作成した天台典籍の目錄であるが、その中に、摩

訶止觀等十一部三十卷を「止觀部」とよび、それに次いで禪門修證十卷以下十四部二十七卷を「禪門部」と名づけてゐる。經藏目錄は、弘仁二年、入唐將來の典籍を納藏²せんとしてその分類を試みた際の目錄であるが、この中にも「天台摩訶止觀十卷」乃至「天台止觀雜壹帙^{唐本}」に次いで、「天台禪門修證十卷」「天台禪門雜壹帙^{唐本}」等とあり、普通にはいわゆる天台止觀法門に屬せしめてゐる諸撰述が、共にかく二分されてゐる。

そしてこれらに就いて、不定止觀たる六妙門が、「修禪六妙門一卷」と記されて、この禪門部の内に收められてゐることが注目される。その他、禪門要略、禪門章及び口決禪法等はもちろん、小止觀並びに覺意三昧、觀心誦經記、金光明懺法、方等懺補闕儀等もこの部に收められてゐる。特に天台大師自身の撰述についていえば、摩訶止觀一部を除く他の殆んど總べてが、むしろこの禪門部に收められてゐるのである。殊に小止觀一卷の如きは、その現行本の序跋等に於いて明らかに見られるように、後世の殆んど總べての學者が摩訶止觀十卷の要略であると思得ていたのに、實は次第禪門十卷の要略なのである。仍ち、既にこゝに、摩訶止觀部に收めないで、禪門部に攝せられてゐることに極めて注目せしめられる。

○

さて、天台止觀部の代表である摩訶止觀十卷と、天台禪門部の代表である次第禪門十卷とを比較して見ると、次の如き諸點が先ず注意されて來る。

その一は、この兩撰述が共に同じくいわゆる十章より構成されてゐることであり、しかも各十章の章名までもが殆んど同じであること、その二は、摩訶止觀に於いて、十章の第七正修章が十境に

分けられている中の後三境と、その後の三大章の全部とが不説闕略のままに残されていることは、古來著名のことなのではあるが、次第禪門の十卷十十章に於いても亦全くこれと同様に、第七修證章の後半部と後三大章とが闕けていること等である。

また、その思想的基調に於いて、摩訶止觀が圓頓の思想に、次第禪門がいわゆる漸次止觀の思想に立つていることはいうまでもないのであるが、しかも次第禪門に於いては「止觀」という用語が殆んど全く用いられていないことなどに、特に強く注目せしめられる。即ち天台大師は止觀の一語を以て全佛教の實踐部面を統攝していたと信じられているが、それは摩訶止觀に依つて天台の思想教學を見るときに於いてのみそういえるのであつて、次第禪門では、淺深次第する諸禪法の内の一科であるに過ぎない六妙法門の中に、止と觀との兩法があるだけであつて、全佛教の實踐面を意味するような「止觀」という用語例は未だこれを見出すことができない。そして摩訶止觀に於ける「止觀」と全く同じ地位を、「禪波羅密」「禪門」「禪法」等即ち「禪」の一字が占めているようである。

次に注意されることは、その各々の選述の年次についてである。

即ち摩訶止觀が天台大師の最も晩年にちかい隋開皇十四年（五九四）荊州玉泉寺での説法であつたのは古來明らかなことであるが、次第禪門は、大師が陳光大元年（五六七）初めて金陵に出て瓦官寺に住していた間の説法に依るもので、即ち大師三十歳より凡そ八年程の間の説法であつたことが明らかにされる。即ち次第禪門十卷は天台大師の最も早い時代の思想、摩訶止觀はその最も晩年に近い思想を示すものであることである。換言すれば、天台大師は、次第禪門に示されているが如き思想に於いて、先ず自から開解し、それ

らがやがて圓熟して、摩訶止觀に見られるような思想に大成したものと考えられるのである。

○

かく見て來ると、いま廣義の、いわゆる天台止觀法門の中に於いて、摩訶止觀十卷を中心とする止觀部に相對して、次第禪門十卷を中心とする禪門部なる一部門を新設することに就いては、左の如き新意義が生じて來るかと考えられる。

即ち漸次止觀と圓頓止觀とを、舊來の如く天台止觀法門の大綱として、並列的に考える外に、その思想教學の進展の過程の上に於いてもこれらを檢討して行く必要が考えられて來る。天台大師の實踐門に屬する諸選述の内、この禪門部に屬せしめるべきものが多いことは、その生涯の説法や教化がむしろこの思想に基づいて行われたことを示すと考えられ、その間に、また「禪」の思想から「止觀」の思想への展開と圓熟とのあとが觀取されて來るはずである。

そして、次第禪門と摩訶止觀とに全く共通するものは、天台大師の生涯を一貫せるものであつたとも見るべきであらう。顯著な一例としては、その兩者の不説闕略分の存在なども、佛道の實踐面に關する天台大師の考え方の最も基本的な特徴を示すものと見るべきであらうかに考えられて來る。

また、次第禪門を初めとし、禪門部諸撰述の中には、摩訶止觀に比して、禪觀に關する諸師の説を引いていることの多いのが、先ず目につく。即ちそれを「研詳」し「去取」したものが次第禪門の組織となつたものと見られ、この點に於いて、天台禪門部の研究は、同時に、それに先立つ中國禪觀思想史の究明に資する點が大きいと考えられる。

また、この禪門部には禪觀に關する諸經等を引用していることの多いのも、一つの特徴である。次第禪門は、禪門修證、禪波羅蜜、禪門などもよばれているが、その具名は釋禪波羅蜜次第法門であり、その具名の示すが如くに、一切の諸經論の中にあらわれている禪觀法門に、次第順序即ち、秩序と體系とを與えて綜合せんとしたものであると考えられる。この意味に於いては、一切經の中にあらわれている禪觀思想の綜合的研究に對し、佛教史上にあらわれた無二の指南ともなり得るものであると考えられる。

また、この禪門部に於いては、禪の一字に全佛法を統攝し、且つ坐禪の一行に全佛道を統攝せんとし、從つて、いわゆる坐禪儀が懇切詳密を極めてゐる。これらの點に於いては、後世に發達する諸種の禪觀法門、特に禪宗との關聯に於いて重大な關係をもつようである。即ち早くは善導、元曉、法藏、道信等の説いた坐禪儀はみな天台小止觀を依用したものかと考えられる。また後世の禪宗の坐禪儀の總べてはみな宗密の坐禪儀に基つてゐるといわれているが、その宗密のいわゆる坐禪法十門とは、天台小止觀の十章の列次に若干の變更を加えただけのもので、殆んど全くその全文を寫しつたものに過ぎない。小止觀を摩訶止觀十卷の要略とすることは、前にも一言したように、全く謬りで、天台小止觀は次第禪門の要略なのであり、次第禪門十卷の中から坐禪の作法と、その内外の用心とを拔萃した如き關係にあるのである。即ち坐禪に於いてのそれらとこの小止觀との關係は、また直ちに、この次第禪門を中心とする天台禪門部との關係として改めて究明されるべきである。

禪宗の四祖道信、五祖弘忍等の思想禪要が、從來傳説されていたところとはむしろ反對に、いわゆる坐禪觀心にその特色があり、殊

にその思想の綱格を導き出していると考えられる燉煌出土の證文論が、實は菩提達磨の撰述ではなくて、天台大師の撰述に外ならぬと考えられること等も既に論じ來つたが、しかもそれはこの次第禪門等と同じ年代の撰と考えられ、これも共に天台禪門部に收むべきものであり、これらは相俟つて、後世のいわゆる禪宗の成立とこの天台禪門部との關係に於いて究明されねばならない。

これらの特質と意義に於いて、從來普通には天台小止觀法門と稱せられてゐる部門の中を、更に止觀部と禪門部とに兩分し、天台禪門部と名づくべき分野をここに開拓して、止觀法門成立、禪觀思想史の研究のための基礎的一部門たらしめたいと考える。

1 「五時八教」といふことが、いつ、何人によつて初めて用いられたかは詳らかでない。三大部を初め天台大師の撰述中には、このことばを見出し得ないようである。

天台の教學といへば直ちに五時八教をいうようになつたのは、高麗諦觀の天台四教儀の流行によるものであらうが、諦觀の四教儀世に行われて爲に台宗の學闡し、と智旭が慨いたように、この書は天台教學の入門書としては根本的に再考すべき幾多の問題を藏していると考えられる。また五時八教説に於いて論ぜられる頓教、漸教、不定教等と、法華玄義卷第十の教相玄義分に於いて「教相を判ずるに即ち六となす。一には大綱を擧ぐ、二には文證を引く、……一に大綱に三種あり、一には頓、二には漸、三には不定。」といつて説かれてゐるところとは、本質的にかなり異つたものであると見受けられる。

天台教判の構成とその特色、後世の天台教判論の變遷と、その結果としての五時八教説の成立に關しては、別の機會を得て

論及したい。

2 現行の傳教大師將來台州錄は、その中に少なからぬ疑問と矛盾とが見出される。然し越州錄は大師親筆本が現存し、經藏目錄も亦その一部が、大師親筆の尤なものとされつつ現存している。現行台州錄に見受けられる甚だしい錯亂は、かつて原本の剝離錯簡等があつたことに因ると推考され、且つ越州錄、經藏錄との比較研究に於いて、その復原がほぼ可能である。これらについても別に論考を試みたいと思うが、いまの引用は、それらの問題には係わらない部分からである。

3 經藏目錄の「天台禪門雜壹帙唐目錄在別本」とは、或は、あなたが次第禪門に關するものの意にのみ解すべきではない、との見方が生ずるであろう。即ち付法緣起等に見られるように、道遙から禪法をも相承したとの説、即ち天台家の人師によつて傳えられていた禪宗法門の意味に於いても天台禪門といふ得るという見解である。然しながら、これらの見方は次の理由によつて否定せられるべきであると考えられる。即ちその一は、同じく經藏目錄の中に、この天台禪門雜壹帙の外に「天台雜并達摩宗雜壹帙唐目錄在別本」なるものが存していることである。

傳教大師の入唐求法の當時、天台山には佛窟遺則や雲居普智等が住していた。遺則は牛頭宗第六祖慧忠の法嗣とされており、傳教大師より十六歳ほど年長で、後に南宗禪、北宗禪・牛頭禪に比肩されているいわゆる佛窟禪の一派が、彼等によつて、大いに興らんとしていた頃である。遺則は張懷瓘に従つて書法を學び獨り筆妙をつくしたと稱讃されているが、傳教大師はその遺則の眞跡をわが國に携え歸つて特に書法の範としている。ま

た遺則の撰たる無生義一卷、遺則の師たる牛頭慧忠の碑、牛頭宗初祖法融の絕觀論一卷、法華經名相一卷、巾子崇慧の刀梯歌等の牛頭禪法門を中心とし、南宗の曹溪大師傳一卷、北宗神秀の撰とせらるる看心論一卷、その他達摩系圖一卷等を初めとして相當部數の禪宗典籍を將來してはいるが、その所要紙數等から考え、且つ經藏目錄中の他の各部帙の量から推して、特に一帙を成すほどではなく、天台雜部と併せて一帙ほどのものであつたかと想像されるのである。これらの點についての詳細も別の機會にゆずる。

その二は、「天台禪門雜壹帙」が「天台禪門修證十卷」即ち次第禪門の直後に列ねられていて、これらの天台禪門とは全く同一意義のものであつたと見なければならぬと見受けられることである。その三は、將來錄に於いて、禪門修證十卷以下に禪門章一卷、禪門要略一卷等を含んで「已上一十四部二十七卷同帙、禪門部四百八十四紙」と明記されていることである。

4 圭峰宗密の坐禪儀と天台小止觀との關係の詳細、及び善導、元曉、法藏、道信等の坐禪儀と天台小止觀の關係等は、拙著「天台小止觀の研究」にゆずる。

5 禪宗第四祖道信の思想と燉煌出土證心論との關係等については、印度學佛教學研究第一卷第二號、第二卷第一號、同二號の拙稿を参照せられたい。

（附記）本研究は文部省科學研究費による綜合研究「佛教の根本眞理」の中「禪波羅蜜の型態と天台止觀の成立」についての研究の一部である。